

# 青蓮院所蔵国宝「不動明王二童子像」の表現技法に関する研究

～造形表現と技法材料の関連性について～

森田早織（東京藝術大学大学院）

## 1. はじめに

京都・青蓮院所蔵国宝「不動明王二童子像」（以下、青蓮院本とする。）[図1]は、天台密教僧安然（841～915?）が創出した観想法「不動十九相觀」を忠実に造形化した現存最古の彩色画像であると示唆される<sup>1</sup>。また絵画様式においても、流麗な線描や鮮やかな彩色技法が用いられ、賦彩を中心とした平安仏教絵画の中でも秀逸とされる。本研究では、不動十九觀の經軌に基づいた初期彩色画像である点に着目し、青蓮院本の作意工程と当初の視覚効果について、実技的見地から検証を行う事を目的とした。研究にあたり、過去の調査による高精細及び科学画像資料や熟覧調査による目視観察を基に、材料の特性や表現技法、制作手順を推察し、在来技術による基底材製作を含めた青蓮院本の技法検証を行った。これらの検証を基に想定復元模写を制作し、青蓮院本に用いられた造形表現と技法材料の関連性について提示する。

## 2. 作品概要

### ❖ 作品名称法量など

名称：絹本着色 国宝不動明王二童子像

所蔵：京都・青蓮院門跡

制作年代：平安時代中期

形態：掛幅装 二段仏画表具

法量：縦 203.4cm × 横 148.4cm 三副半一鋪（第一幅

17.1cm、第二幅 48.7cm、第三幅 47.3cm、第四幅 35.3cm）

### ❖ 不動十九觀に忠実な図様

密教における観想とは、修行者が自らの内面をイメージによって変革する鍛錬法である。不動「十九觀」は修行者が不動尊を観想するにあたり、具体的にイメージを思い浮かべ一体となる為の十九の手順を記したものである。



図1 青蓮院所蔵  
国宝「不動明王二童子像」

1 庄司晃子「「十九觀」についてー不動明王図像との関連についてー」『金沢文庫研究第19卷3号・通号203号』  
金沢文庫 1973年2月

### 3. 仮説

#### ❖ 制作当初の表現技法、視覚的効果の復元

青蓮院本は観想礼拝を行う目的と修法の空間が密接に関わった大変重要な画像であるといえる。しかし、現在では経年の変化などにより制作当初の視覚効果を伺う事は難しい。また青蓮院本はこれまで実技的研究は数少なく、色料、技法、制作工程は不明な点が多く挙げられる。

そこで本研究では、修法の目的・空間性を考慮した青蓮院本の制作当初の表現技法及び視覚的効果について、想定復元模写を通して実技的見地から検証を行った。特にⅠ、線描と基底材の関連性、Ⅱ、彩色技法、Ⅲ、背景・迦楼羅焰の空間性について実技検証を行い、造形表現と技法材料の関連性について考察を行った。

### 4. 検証と結果

#### I. 線描と基底材の関連性

赤外線写真 [図2] 及び熟観調査によって得た高精細画像撮影から、三尊の輪郭線には描き起こしの痕跡は見られなかった。この事から初めに絹に描いた線描を最後まで活かし、彩色が施されていると推察された。また多種多様でキレのある線描である事から、基底材の重要性が指摘される。この事を踏まえ、絵絹の構造及び性質について検証すると共に、青蓮院本の絵絹と線描と彩色の構造関係について実技検証及び考察を行う事とした。

絵絹は古来より東洋絵画や書画などの基底材として用いられる平織の絹である。絵絹の織組成と表現技法の関連性についてはこれまでにも指摘されており<sup>2</sup>、絵絹が性質を異とする一因として製糸ならびに製織技術面の違いが挙げられる。青蓮院本においては画面の中に多様な線種が見られる事から、運筆に滞りの少ない絵絹の可能性が指摘された。そこで現代の製糸・製織技術（自動織糸ならびに織機を指す。以下、現代技術と略。）で製作した絵絹と、在来製糸・製織技術（手回し糸繰り器ならびに手機を指す。以下、在来技術と略。）で製作した絵絹について、描画表現を中心に比較実験を行い、青蓮院本の描画及び彩色に適した絵絹の製作を目的とした<sup>3</sup>。



図2 赤外線画像

(検証) 過去に調査された青蓮院本の接写画像、及びX線透過画像から織組成・織度・構成を推察し、現代製糸及び在来技術の絵絹を用いて、線質及び彩色の比較実験を行った。

2 杉本欣久、竹並遠著「黒川古文化財研究所所蔵の日本・中国絵画の絵絹について」『古文化研究』黒川古文化財研究所 2008

3 2013年「絹本著色古典絵画の模写制作における基底材に関する研究－在来製糸製織絵絹をもとにした描画実験をとおして－」文化財保存修復学会第35回大会（勝山織物（株）絹織製作研究所 志村明氏 秋山賀子氏との共同研究による）

絵絹製作全般においては、勝山織物（株）絹織製作研究所 志村明氏 秋山賀子氏にご協力頂いた。

### (試料) 青蓮院本の織組成

経糸 : 17 ~ 18 中 24 本 × 2 本 / cm  
緯糸 : 17 ~ 18 中 2 本引き揃え 36 本 / cm

(結果) 今回製作した現代技術と在来技術の絵絹では、糸の断面の形状が異り、現代技術は断面が丸め（丸め糸）で、在来技術は断面が平め（平め糸）の状態である事が分かる。これらの糸を用いて製織し、線描を施し、線質の違いを確認した。

丸め糸は、絹が墨をはじき線描に滲りを感じた。糸の凹凸や撥水性の高さが一因と考えられる。在来技術で製織した絵絹は、筆あたりが滑らかで、線の輪郭が明瞭となった。断面図を見ると、丸め糸は墨線の接する面が少なく、平め糸は多い事が分かる。[図 3, 4] この事が、筆あたりの違いに影響を与えていていると考えられる。

この結果を踏まえ、青蓮院本の線描を再現するにあたり在来技術の平め糸を用いて絵絹を製作し、想定復元模写を行った。

## II 彩色技法 - 裏箔・裏彩色を用いた彩色構造 -

### i. 本尊肉身の色料と彩色構造

(検証) 平成 25 年 7 月 30 日に青蓮院本の熟観調査では目視観察及び高精細画像撮影\*による情報を得る事ができた。これらの情報を基に、本尊に用いられた色料について推察をおこない、実技検証をとおして彩色構造の検証をおこなった。

(結果) 本尊肉身の彩色構造

墨線の後、裏面から朱と染料（今は綿臍脂）を用いて裏面から量取りし、更に裏面から濃い色調の群青を施した。表から明るい群青をのせる事で、青い肌の色が浮かび上がり、赤い量は焰の照り返しを表現している。[図 5]

### ii. 裏箔と彩色

(検証) 三尊の装身具には裏箔の痕跡が確認され、また部分的に彩色が施されていた。これを踏ま



絵絹断面図  
経 : 平め糸 14d 48 本 / cm  
緯 : 丸め糸 40d  
経 : 平め糸 14d 48 本 / cm  
緯 : 平め糸 40d

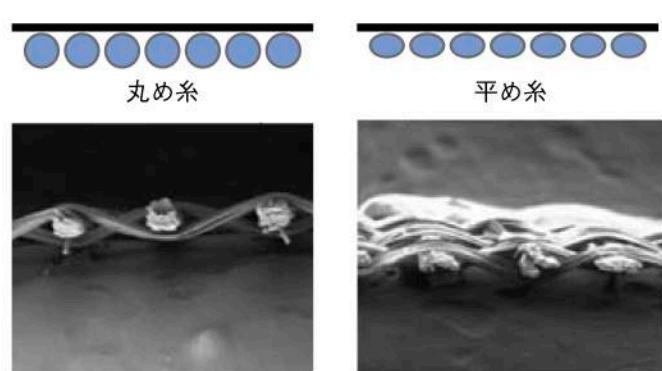


図 3 丸め糸 150 倍

図 4 平め糸 150 倍



図 5 本尊部分 彩色構造

え、裏箔部分の彩色構造について実技的に検証を行った。

(結果) 墨線の後、裏面から箔を貼ることで箔の強い光の反射を抑制する。[図6] 表から白の暈しや緑青をかけることで、装飾品の物質感を表現している。[図7]

### iii. 文様と彩色

(検証) 経年の変化で薄れた部分の文様を想定復元し、実技検証を通して彩色構造について実技検証を行う。

(結果) 墨線の後、裏面から立体を意識しながら彩色を施す。表面にも薄く彩色をかけ、文様を描いた後、隈をかけている。裏表からの数層によるレイヤー効果で、モチーフの物質感と立体感を表現している。[図8]

## III. 背景・迦楼羅焰の空間性

### i. 背景（空と地面）

(検証) 背景の空と地面の堺の有無を確認するため、原本閲覧調査において高精細撮影を行った。

1. 画面上部 2. 境界線と想定した童子の腰の高さ付近 3. 地面の三箇所を撮影し、絹に付いた色料について観察を行った。

(結果) 高精細写真で確認をした所、空部分の絹は素絹に近く透明度が高い。しかし、均一に裏面から赤い粒子がこびり付いている事から、裏から赤系色の顔料を施したと推察された。また、地面部分には土系の色料がこびりついており、地面を意識して描かれていた事が明らかとなった。[図9]

### ii.迦楼羅焰

(検証)迦楼羅焰に使用された色料及び構造について考察を行うため、過去に撮影された赤外線写真及びX透過画像資料を参照した。また、彩色が表裏どのような順番で彩色されているのか、実技検証を行い迦楼羅焰の彩色構造について考察を行った。

(結果)迦楼羅焰は、辰砂と鉛丹の具と鉛白で焰が描かれてた。焰の輪郭線は辰砂で描かれ、具勝



図6 装身具の裏箔

図7 装身具の表彩色



図8 本尊条帛文様



図9 高精細画像

ちな鉛丹の具を裏面から施し、表から辰砂と鉛丹の具で迦楼羅を描く。この時下書きによる朱線が、焰の消え行く余韻として効果を發揮している。また煤を表す墨は、焰の隙間だけではなく、焰の上にかぶせる事で、消え行く焰とまわりの背景とをつなぐ役割を果たしている。

## 5. 総括

本研究では、青蓮院本の想定復元模写 [図 10] を通して、技法と材料の関係性を指摘した。青蓮院本の構図、技法、材料の質、色の配置など全てにおいて工夫が施され、計算されている事が判明した。先にも述べたが、青蓮院本は観想像である事から、観者が不動尊をイメージする為の導き手としての要素を持ち備えた礼拝画像である。観者が不動を觀想するにあたって重要なのは本尊であり、一つ一つが狭軌に正確に成り立たなければならない。なおかつイメージを掲き立てるための表現の要素も重要である。この事から、本尊を制作するにあたっては密教に関して深い知識を持ち精通している事、高い技術力と表現力を持ち合わせている事が必須である。青蓮院本を実技的見地から検証していった結果、これらの要素の多くが当てはまる事が判明した。更に作者は修法を行う薄暗い空間において燃え上がる護摩の光、または蠟燭などの光でいかに効果的に本尊を見せるかという事を計算している。また、青蓮院本に用いられた材料は類似作品と比較しても、大変上質なものを使用している事が判明した。特に絵絹に関しては、目が細かく均整のとれた一級品である。従つて本尊制作にあたっては、発願者は然るべき人物であり、当時の最高の絵仏師によって研究が重ねられて描かれた一級品であるといえる。また想定復元模写制作を行う事で、その像容や配色、装飾も上品であり、装身具の華やかさなどは円心様に類似する事が判明した。この事から、先学で論点となっていた青蓮院本制作の時代についても 10 世紀後半からやや下る可能性も否めない。これらの問題については、充分な試料が少ない事から今後の課題としたい。

最後に、青蓮院本が描かれたのは不動「十九觀」が成立して 1 世紀もの期間を経てからである。つまりは、「十九觀」の像容図様を創りあげる事が困難であったと考えられる。青蓮院本はその中でも珠玉の像であった故に、現在まで大切に受け継がれ、私達が目にす る事が可能なのではないだろうか。



図 10 想定復元模写